

A Case Study on the GIS Database Construction of Landscape Resources at the Surround of Landscape

はじめに

圍繞景觀は、身近な景觀、身の回りに見ることのできる景觀である。その圍繞景觀の景觀資源は、地域・地区に生活する人が日常的に見ることができ、または、生活の中に溶け込んでいる。これらは、歴史的に時代を経たものや、日常生活の延長上に存在するものもあり、身の回りの空間に存在自体を強く主張していないものもある。景觀資源そのものについては、視覚的に体感する、もしくは無意識に視野内に入っていると、人それぞれに認識が異なるものもあるが、圍繞景觀の景觀資源を無意識に認識している場合が多い。

圍繞景觀は、意識しないうちに、それらの資源がいつの間にか消失し、違和感を生じることもある。身の回りの景觀の変化は、生活をする上で精神的な不安定さをもたらす場合も考えられる。こういった中で、圍繞景觀の資源のデータベースは、その視点となる場所の確認が非常に難しく、眺望景觀のように眺める景觀とは、視点が異なるものであるため、その景觀資源の抽出は、難しいものと考えられる。

したがって、本論文では、圍繞景觀の景觀資源について、どの様なものが考えられるのか、抽出方法を検討するとともに、実際に抽出された資源のデータベース化のための手法を構築することを目的とした。

調査地

ケーススタディの調査地は、都市近郊農村で、

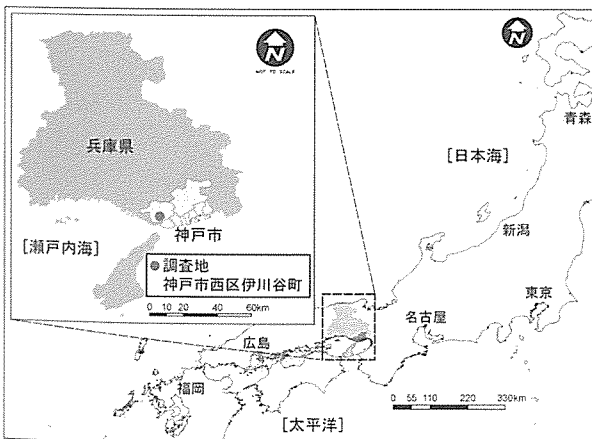


図1 調査地位置図

周辺域にはニュータウンが存在する兵庫県神戸市西区伊川谷町である(図1)。当地区は、弥生時代より人が定着した遺跡も存在し、古くから人が生活しやすい環境であったと推察され、寺院や武家勢力による統括を経て、現在に至るまでの景觀を形作っている。調査地は、丘陵地の尾根に挟まれ、なだらかな谷部に河川(明石川支流伊川)が流れる谷津田型の農空間を構成し、周辺域は低層の住宅を中心としたエリアである。

また、調査地は、山系部(六甲山系)から平野部(播磨平野)に向かって広がる丘陵地の尾根によって各地区が分断される構造になっており、伊川谷はそのひとつのユニットとして構成された地区になる。ユニットの範囲は、尾根や字界を参考に、範囲設定をした。

調査方法

調査方法は、フロー(図2)に示したように進めた。既存資料や地形図の収集、整理、調査者による現地踏査、住民に対するアンケート調査などを行った。

基礎情報の把握として、地理情報システム(Geographic information system: 以下GIS)による調査地の地形構築を進めた。本調査では、国土地理院

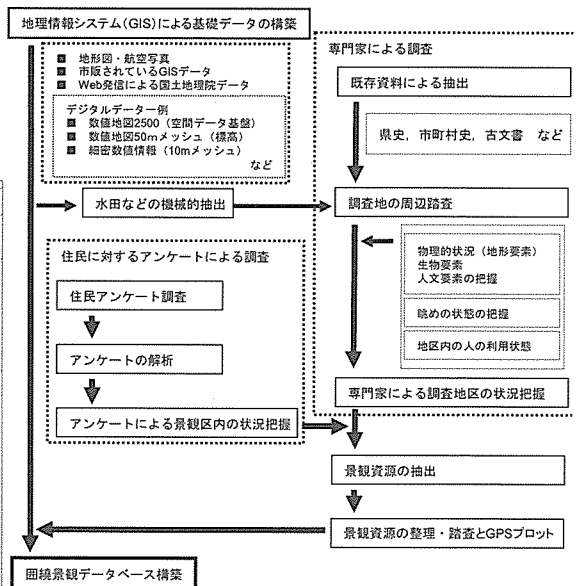


図2 調査フロー